

【特集】

放射線技師教育50年を回想して

山田 勝彦(31 回生)

レントゲン技術専修学校の教員としてお世話になったのは、1958年4月であり、今年2008年3月でちょうど50年になる。まさに奇遇と言わざるを得ない。

昭和31年3月に同校を卒業し、大津市民病院に2年間お世話になったが、故木村幾生先生の強い勧めで母校の教員の道を歩み始めた。このときの木村先生のお言葉は「技師は技師が教育すべきである」。このお言葉は今も脳裏に焼き付いている。50年を経過した現在では多くの卒業生が技師教育に従事されているが、当時は診療エックス線技師法が制定されて数年経過したばかりの時代であるから、全国的にもこのような事例は初めてのことであったらしい。

実験指導程度の軽い気持ちで赴任はしたが、木村先生が独自に計画された「放射線写真学」なる科目を担当することになり、これには教科書もなく随分と苦勞したことを思い出すが、多分学生さんが一番迷惑されたのではないかと思う。

昭和38年になって、木村先生から次のような言葉を聞いた。「私は島津の中央研究所に行くから後は山田、この学校はお前に頼んだよ。」まさに驚愕の一言である。島津中央研究所主任研究員として転任される先生を留めるわけにもいかず、まさにこれからが一人教員としての苦勞が始まった。この年はちょうど40回生が入学された頃と思うが、その後、昭和45年になって西谷源展先生が専任教員として赴任して頂くまでこの苦勞が続く。その後、昭和56年になって55回生の故藤本信久先生が就任され、やっと専任教員3人となり、なんとか学生さんに大きなご迷惑は掛けなくなった。その証拠に藤本先生の就任された年の国家試験合格率が100%であったことを今も記憶している。このように専門学校時代の教育は専任の教職員数は極めて僅少ではあったが、非常勤講師の先生方は京都大学を中心とした今から考えても全国的に実に著名な先生方ばかりで、教育レベルは結構高かったと思っている。

その後、平成元年には横地理事長、鳥山校長の並々ならぬご努力により念願の京都医療技術短期大学が開学し、そして昨年平成19年には私にとっても長年の悲願であった京都医療科学大学が開学した。教員数も専門学校とは比べものにならない21名となり、教育内容も充実して、まさにこの世界で大きく胸を張って歩けるようになった。

このような私の50年がここに終わったが、今振り返ってみると、この間に私は実に大きな財産を頂いたと思っている。それは多くの卒業生がこの医療社会の中で、大きく成長し立派に活躍されているという、まさに無形の財産である。その一つに挙げたいことは、43回生の4人の方が、時を同じくして長崎大学、高知大学、神戸大学、三重大学の旧国立大学の技師長に就任されたこと。もちろん、この他にも数人の方々も全国著名病院の技師長に就任されている。まさに素晴らしい43回生である。次に挙げたいことは、41回生の熊谷和正氏が日本放射線技師会長に、そして45回生の藤田透氏が日本放射線技術学会長

に、まさに同時期に両会長に就任され、昨年の大学開学式にはお二人お揃いでご出席され祝辞を頂いたことであり、私にとってこれほど嬉しいことはなかった。そして新しく開学した大学に8人の卒業生が教授、講師、助教として大学教員に就任されたことなど、語れば尽きないほどの素晴らしい出来事が沢山思い出される。このように在職 50 年間にお世話させて頂いた多くの卒業生の方々のご活躍によって、私はほんとうに素晴らしい「無形の財産」を頂いたと、深く感謝している。これも今日まで私を暖かく支えて頂いた、周りの多くの方々のお陰と深謝するばかりであり、ここに厚くお礼申し上げます。ほんとうに長い間有り難うございました。

以上

* 通巻 188 号 2008 年 7 月 10 日発行 (H20 - No.2) より